



[今月の聖書]

C20・05『慰めに満ちた神』

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」(ヨハネ 16:33)

「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとおりに、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、同じような苦しみの数々に会っているのである。あなたがたをキリストにある永遠の栄光に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみの後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう。」(Iペテロ 5:6-10)

「万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。」(Iペテロ 4:7、12、13)

「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(Iコリント 10:13)

お元気でお過ごしでしょうか。「万物の終わりが近づいている」と、現在と未来を預言する峻厳な言葉で貫かれているペテロの手紙をご紹介します。現在日本ばかりでなく全世界がコロナウィルスの蔓延のために恐れおののいています。死の恐怖が一人一人に迫っています。また経済的にも、20世紀にもなかった大きな恐慌が訪れるのではないかと心配する人もあります。新約聖書の歴史は、初代教会の迫害の中における信仰者の生き方の記録であると言っても過言ではありません。そしてイエス・キリストの十字架と復活のメッセージは聖霊の働きによって福音を拡散させ、あらゆる困難を刺し貫いて教会を全世界に確立したのです。今日ご紹介するペテロの第一の手紙は、初代監督ペテロの、信徒と全世界の教会に対する慰めの言葉です。このような時代にライトハウスはどのようなメッセージを語るべきか祈っているときに、主は今日のみ言葉を示されたのです。万物の終わりが近づいていることを知り、慰めに満ちた神の愛を受け、不動の信仰をいただきたいと思います。また死刑囚となって、イエス・キリストに出会い、新しい命に羽ばたいた久田徳三さんをご紹介します。まさに「甦った人」でした。この恵みの神の臨在の中に力強く前進していきましょう。祝福をお祈りいたします。

(お知らせ)

- *4月、5月の地区集会は休会となります。緊急事態宣言解除後にまた次の集会のご案内をいたします。
- *多くの教会で礼拝が開かれなために、CFIの毎週のメッセージ(月額5,000円)を希望される方が増えています。電話、ファクスマイル等でご依頼があれば次の週からお送りいたします。
- *メサイア2020は厳しい条件の中で開かれましたが、その素晴らしい記録をご紹介します。メサイア2020記録DVD(3000円)CDは残部わずか。
- *ライトハウスからのチャペルメッセージはYouTubeでもご覧いただけます。YouTubeのアプリ、またはホームページで **lighthousecfi** と検索して下さい。チャンネル登録して下さい。今後配信される動画が簡単にご覧いただけます。またテレホンサービス(03-3717-5108)でもメッセージを聴くことができます。ご利用ください。

私は妻奈津子、それに子供たちのバプテスマの後に示され、2001年8月、バプテスマを受けた。

当初は救いの実感を感じる事が出来なかったが、礼拝に出席し、賛美歌を唱和するうちに心から主に捧げる事の心が整えられる気持ちとなった。教会での説教や小田彰牧師等のテープメッセージを聞くうちに次第に聖書に向き合う気持ちが醸成された。

2008年聖書学校に入学、2010年伝道コース、2013年聖書神学校と進むうちに聖書の学びが面白くなり始めた。

その間に大腸癌の発見と手術そして同じ時期に私の友人の妹が同じ病で手術するという事件と出会い、彼女は再発して人生を終わるということになった。この事件は、私の人生の大きな転機となった。

教会の朝拝会が毎朝6時半から行われていることを知り、それにも参加することができた。

毎朝、聖書を1章ずつ読みすすめ、感じた個所を発表するという訓練は信仰成長に大きな働きを得ることができた。そして神学校ではさらに大きな学びの時間を持つことができた。

神学校の学びで10日の断食の時に神の声を聞くことで、「力を捨てよ、主に従え」というささやきを素直に聞き、その翌年4月から、聖書の学び会をスタートさせた。

毎月の学び会と資料の作成は私にとって一つの転機をもたらした。神学校を終えるころには自分で開拓教会を始めようと思いはじめた。

現在、「久米めぐみチャペル」をスタートさせているが、キリスト教関係の書店であるライフセンターの2階がこれまで礼拝に使用していた複数のキリスト教団体が引越しをし、たまたま空いていたのでそこを使用し、伝道の働きをスタートすることができた。この年齢になって神に召され牧師の道を歩むとはとても考えることはできなかったが、主が導いて下さるという安心感が勝り今日に至っていることを主に感謝することができる。

なぜこの年齢になってよりによって厳しい世界に入るのかと問われることがある、人生の仕事を曲りなりにもやり終えて、定年前に牧師という新たな仕事に就くということは自分でもうまく説明できない。正直に言えば主に言われたということかもしれない。

日本のキリスト教会は高齢化、牧師不足の中で先行き暗い話しか聞こえてこない。しかし主が言われるのである。そのために余生を十二分に活用しなさいと主は言われる。私にとって余生は与生である。与えられた人生を神のために用いる、捧げることにこれ以上の幸いはないのである。

人生の後半戦すなわち、熟年の域を迎えて、これからどのような人生を送るかを振り返ってみたい。神の臨在と不思議を体験したものに対し、牧師という働きを職業などと考えたことはありません。

これは、主から預かった一生の仕事なのだ。そんなことを考えながら、神の哀れみにすがって、生きていこうと考えている。熟年を迎え、悠々自適な余生を送ることも選択肢の一つでもあろうが、私は主の言葉を素直に聞く心を握りしめ主とともに歩む人生を選びたいと思う。

「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」

(ピリピ2:13)

「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」(ルカ5:4)